

## 城下町の庭園と庭園を結ぶ水路の特性

佐々木邦博\*・米林由美子・平岡直樹\*\*

\*信州大学農学部 長野県上伊那郡南箕輪村8304

\*\*エスパス研究所 長野県上伊那郡南箕輪村8306-1315

**要約** 城下町における庭園の池は、一般的には、屋敷外の水路から水を引き入れ、そして水を戻している。しかし、上にある隣家の池から水をもらい、下にある隣家の池に水を流す水路システムを持ち、現存している城下町がある。長野市松代町、群馬県甘楽郡甘楽町小幡、福岡県甘木市秋月がそうである。三城下町の水路システムを比較し、それぞれの特徴を明確にすることが本研究の目的である。その結果、水路の目的、範囲などがそれぞれ全く異なることが明らかとなった。いずれも貴重な水路であり、保全に努めるべきであることが示された。

**キーワード**：松代、小幡、秋月、城下町水路網、庭園

### 1 研究の目的

江戸時代に数多く作られた城下町には、城の周辺に武家屋敷町が形成され、その屋敷内には庭園が整えられていた。庭園に池が造られる場合も多かった。池の水は屋敷の前の水路から取水し、庭の池まで流れを造り、そして池からまた水路まで水を流している場合が多い。水路の水を使い、水路に返すという一軒ごとのシステムである。しかし、庭の水を水路に返さずに、隣の屋敷の庭へ直接流していくという水路のシステムを持つ城下町も、数は少ないが存在する。庭と庭とを結ぶ水路のシステムである。現在この水路システムを持つことで知られている城下町として、長野市松代町、群馬県甘楽郡甘楽町小幡、福岡県甘木市秋月が上げられている。長崎県国見町神代にも存在したが、資料がまだ未整理であり、現在ではすでに隣家に水を流さなくなっているため、今回は除外することにする。

本研究はこの庭と庭を結ぶタイプの水路のシステムに着目した。3つの城下町に残る水路を比較検討し、それぞれの特徴、相違を明確にすることが本研究の目的である。この研究が城下町の歴史的環境の保全にいささかなりとも役立つなら幸いである。

### 2 研究の意義

庭と庭を結ぶ水路システムの維持には困難が伴う。

受理日 6月30日

採択日 7月30日

一軒が水路を廃止しただけで、下流に水が流れなくなるからである。よって、水路網の貴重さと特徴を明らかにしておくことが必要である。

現在、このような水路システムが残されているのはこれらの城下町にすぎないが、それぞれの水路には特徴がある。城下町を比較することによりそれぞれの特徴、相違を明瞭にすることができる。本研究は、城下町の水路網を中心とする貴重な歴史的環境を保全していく上で、きわめて意義深いものといえる。

主要な研究や調査報告だが、松代に関しては、最初の水路網の研究調査報告書は東京大学工学部の大谷幸夫と西村幸夫らが中心となって作成した長野市教育委員会による「庭園都市松代（伝統的建造群保存対策調査報告書）」(1982)<sup>1)</sup>である。道の中央を流れるカワと、宅地の裏の境界線である背割り線を流れるセギと、庭園から隣家の庭園へと流れる水路とが、複雑な水系を作り上げていることを明らかにしたものである。庭園から隣家の庭園へと流れる水路を「泉水路」と名付けたのはこの報告書においてである。次に信州大学工学部建築学科松本直司研究室による「長野市松代三町水路活性化についての報告書」(1985)<sup>2)</sup>では、長野市により1984年に伝統環境保存区域に指定された表柴町、馬場町、代官町において、当時の泉水路の調査を綿密に行っている。次に佐々木邦博、米林由美子、平岡直樹は、「城下町松代（殿町地区）において江戸時代に造られた泉水路の形成過程とその用途」(2001)<sup>3)</sup>において、松代町の中心部である殿町地区の泉水路の形成及び変遷の過程を、当時描かれた水道絵図から明らかにして

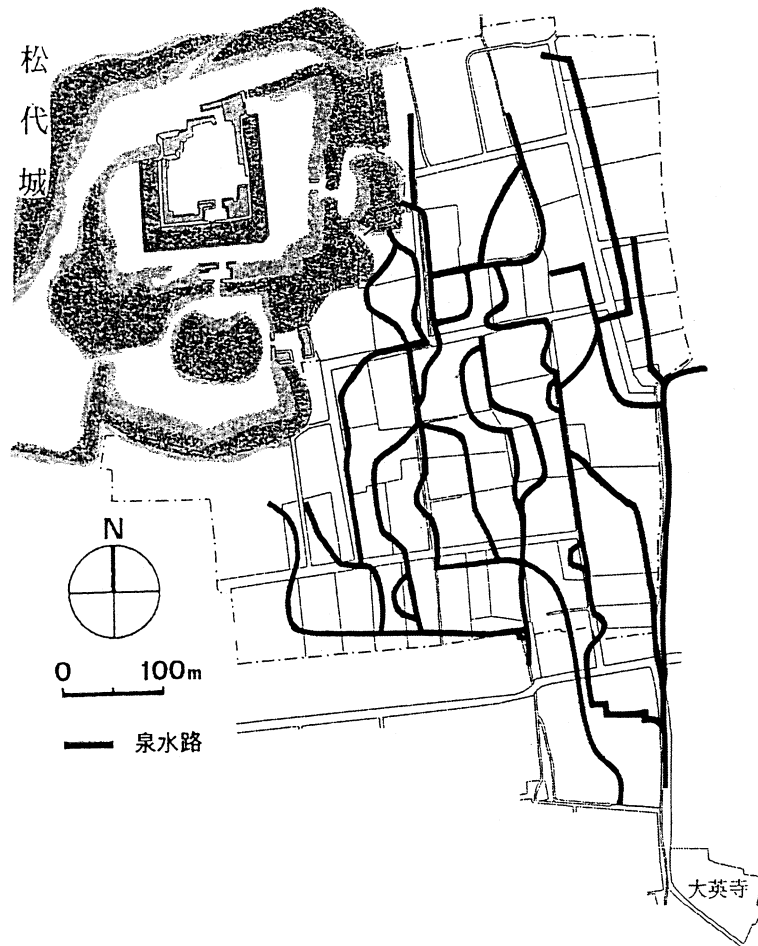


図1. 「紺屋町近辺水道絵図」(年代不詳)に見られる殿町の泉水路

いる。さらに米林由美子、佐々木邦博は日本造園学会で「長野市松代町の伝統環境保存区域全域における水路の現状と今後の保全について」(2002)<sup>4)</sup>を発表している。

小幡に関しては伝統的建造物群保存地区に指定された時の調査報告書「小幡の町並」(1983)<sup>5)</sup>があり、城下町絵図や水路、庭園などがまとめられている。

秋月に関しては伝統的建造物群保存地区に指定された時の保存対策調査計画報告書「秋月」(1980)<sup>6)</sup>があり、城下町絵図や水路、庭園などがまとめられている。また、國基博、永松義博が日本造園学会九州支部大会で発表した「福岡県秋月地方の庭園について」(1999)<sup>7)</sup>では、庭園のタイプを明らかにしている。

以上が既往の研究である。以上の城下町の庭園と水路を比較検討する点で本研究は新たな面を明らかにするものと言える。

### 3 研究方法

江戸時代に描かれた城下町絵図を用い、城下町の姿を俯瞰した上で、庭と庭とを結ぶ水路の性格や特徴を探るとともに、それぞれの城下町に残る水路の現状を探り、比較検討する。

### 4 城下町

#### (1) 松代

松代は長野市中心部から南へ約10kmのところにある。西から北へと千曲川が流れ、北東から南西にかけては尼飾山、皆神山、ノロシ山、象山などの山によって囲まれている場所にある。

松代に城を築いたのは武田信玄であり、1560年(永禄3)前後のことといわれている。1622年(元

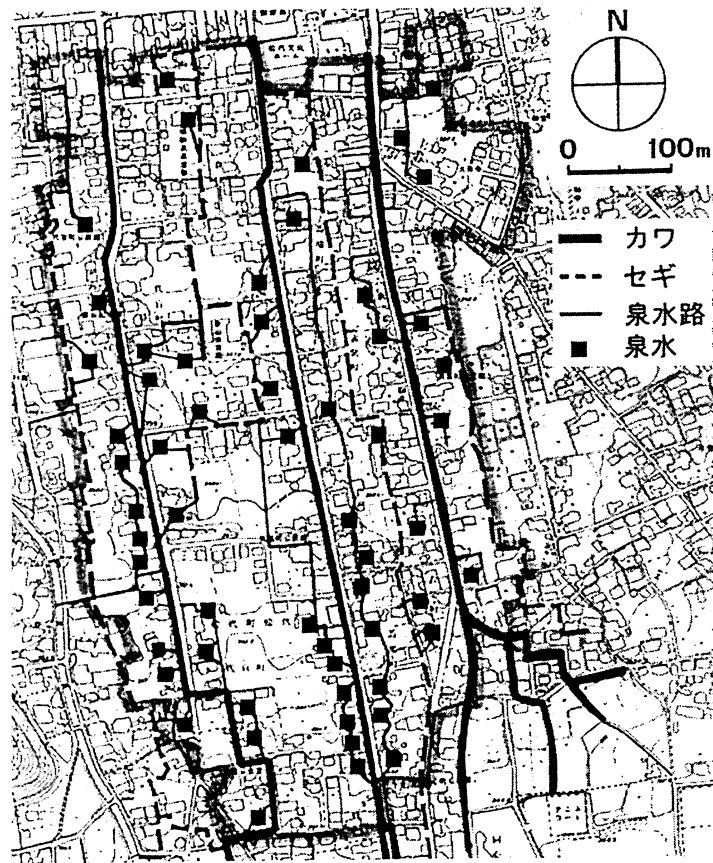


図2. 代官町，馬場町，表柴町に残る水路の現状

和8)に真田信之が上田から松代に入封してから城下町が整備され、拡充されていった。城の東と南側には上級武家地である殿町と清洲町が配され、さらにその南と東を北国脇街道が鉤の字形に通じ、町人町がその両側に配された。そしてその南に中級・下級武家地が形成された。有楽町、竹山町、代官町、馬場町、表柴町などである。今日でもこの地区には武家屋敷町の面影が残されている。

城下町の形成の時に水路も整備されたと考えられるが、資料は残されていない。大英寺の湧水から殿町などに水が引かれたと伝えられている。泉水路に関しては真田家文書中に水道絵図が25枚残されており、その研究<sup>8)</sup>により次のことが明らかになっている。最初の点だが、殿町では木樋による道路沿いに直線にのびる水路と地表を曲線を描きながら流れる水路の2種類が認められる。前者は上水路、後者は泉水路と推定される。後者は流れの数が多くなった後(図一1)、明治時代に少なくなっていった。次の点は、代官町では各屋敷がそれぞれ道路の水路から水を引き入れ、またその水路に水を返すパターンが認められた。そして各屋敷には水溜と書かれた池

があった。それらの池が道路の水路から独立した水路でつながった絵図が残されているので、次第に現在の泉水路が代官町でも形成されていったと考えられる。第3の点として、城下町東部にある上田町の絵図には4軒の屋敷が描かれ、それぞれの庭の池を泉水路が結んでいる様子が具体的に描写されている。これらの結果から、泉水路は松代の武家町一帯に造られていた可能性が強いことが明らかになっている。町人町においては確認されていない。

城下町絵図では長野県歴史館にある1792年(寛政4)の「信陽松城絵図」や真田宝物館にある「御家中屋敷絵図」(年代不詳)に水路が詳細に描かれている。いずれも道路を流れている水路や、現在「セギ」と呼ばれている水路の一部が記されているが、残念ながら泉水路は記入されていない。

現在残されている泉水路はほとんどが城下町南部の竹山町、代官町、馬場町、表柴町にある。つまり中下級武家町であり、城下町全体の一部に過ぎない。この区域には、前述した3種類に大別される水路網がある。道沿いを流れるカワ、泉水路、屋敷の背割り線を通るセギである。かつての水路網が全て残

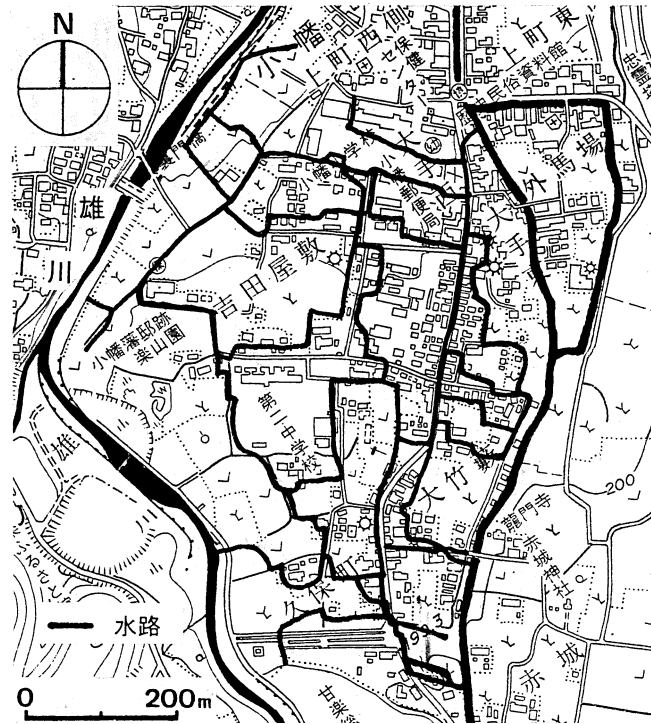


図3. 「小幡藩陣屋内絵図」(年代不詳)に見られる水路

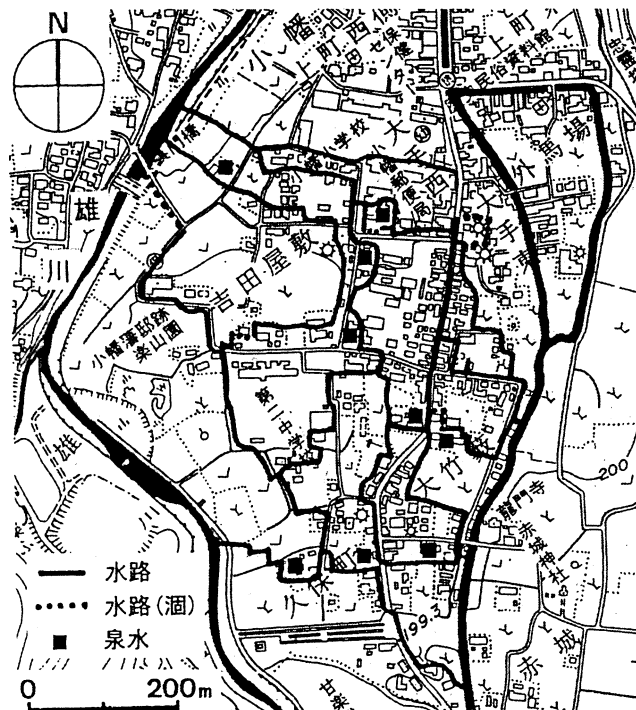


図4. 小幡陣屋内の水路の現状

されているわけではないが、現状の水路網を考察するとかなりの水路がここには残されていると考えられる(図-2)。しかも残されている水路が複雑に絡み合う水路網を形成していることが特徴である。

上級武家地である殿町には堀となっている大きな

水路しか残されていない。池が残されている屋敷が2軒はあるが、泉水路は池付近に痕跡となっているにすぎない。

#### (2) 小幡

小幡は群馬県高崎市から南西に12kmのところの

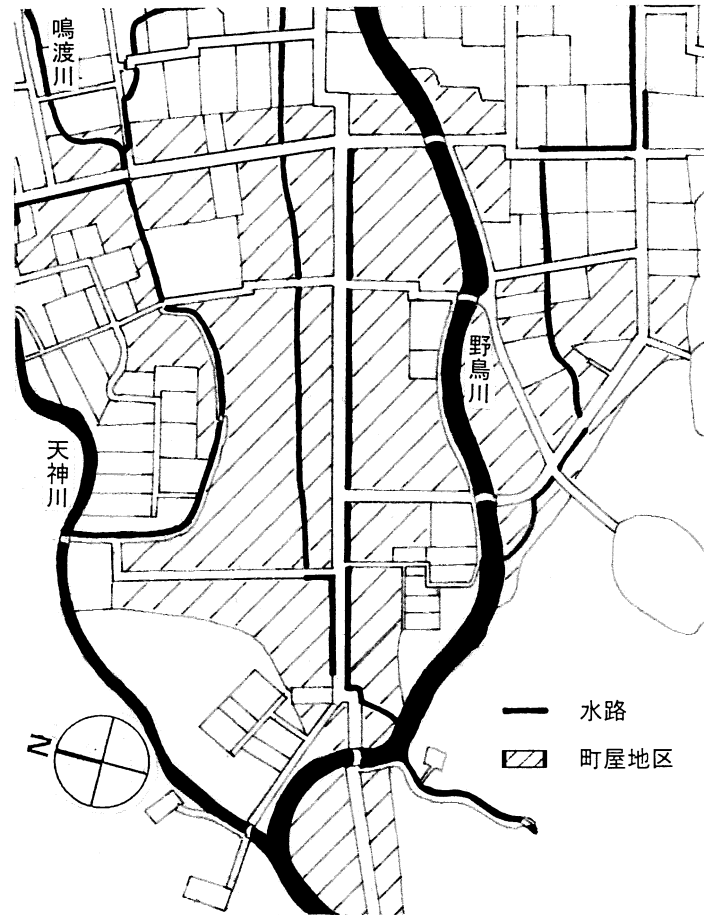


図5. 「文政二年秋月御城下絵図」(1819)に見られる町屋地区の水路

山裾にある城下町である。南側には熊倉山などの山がそびえ、城下町の西側を雄川が南西から北東に流れている。東側は丘になり、北側は開けている。北側に下る傾斜地にこの城下町は形成された。

小幡に城下町を築いたのはこの地を拝領した織田氏である。三代目信昌は1629年(寛永6)に小幡に居館を定め、地割りをし、水道を見立てたとされる。町の構成は表門により二分され、上流である北側の方は陣屋(居館)を中心とし、武家屋敷が集まった場所で、陣屋内と呼ばれている。表門から南は道の左右に町屋が並ぶ地区である。このように、武家屋敷の町と町人の町とが明確に区分され、表門の南北に隣接していることがこの町の特徴である。

この町の水道だが、雄川堰用水を利用している。農業に使われていたこの用水の開設の起源は知られていない。織田氏の時代以前と考えられている。用水路は雄川とは反対に町の東側を流れ、大堰と呼ばれている。そして武家屋敷を流れている水路は小堰と呼ばれ、陣屋内の武家屋敷の間を幾筋も水路を回している。1767年(明和4)の「上州甘楽郡小幡御

引渡絵図写」と(年代不詳の)「小幡藩陣屋内絵図」にその様子が描かれている。前者は道筋に水路を巡らしている様子が描かれ、そして後者では小堰が増え、道筋ばかりではなく、屋敷から屋敷へも直接水が流れている水路が描かれている(図-3)。小堰の水路は別系統を形成せず、道路沿いの水路から屋敷へ取り入れたり、屋敷から道路沿いの水路に水が流れたりしている。この水路の利用だが、上水やその他の生活用水を供給していたといえる。水路と池とのつながり方だが、水路から水を取り入れ、水路に返すという方法が一般的である。つまり、水路は庭から庭へと流れているが、直接池と池を結んではいない。やはり、上水として使っていたことに起因していると想定される。

町屋地区は、通りに大堰が流れているだけで小堰のような水路は見られない。上水や生活用水としてのみ使用していたことと考えられる。

現在残されている水路だが(図-4)、絵図と現況を比較すると、大堰は変わっていない。小堰は部分的に流路が変えられたり、なくなったりしている

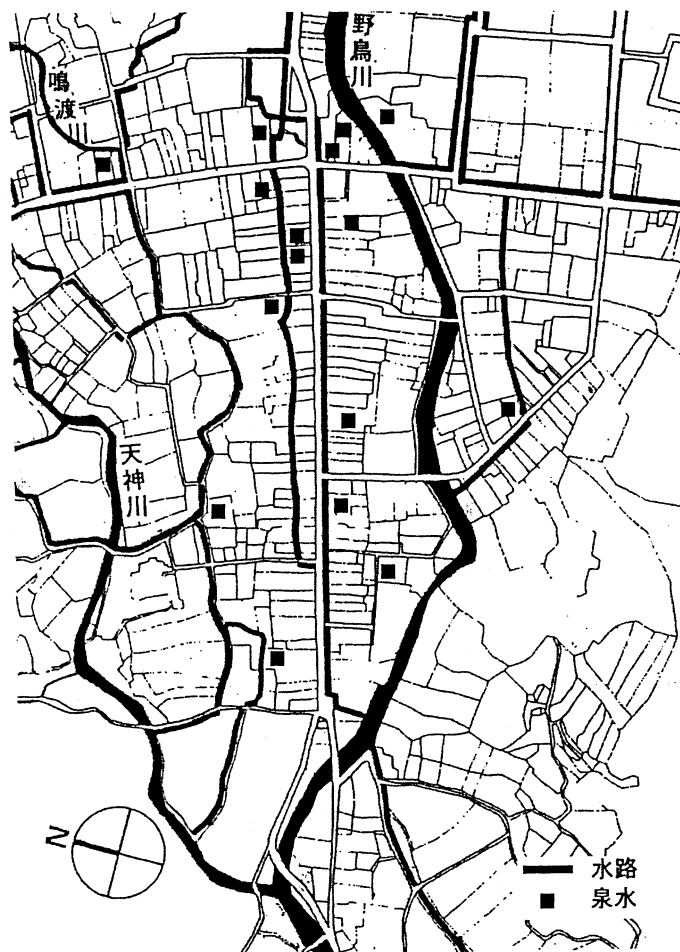


図6. 秋月町屋地区の水路の現状

が、大部分は残されているといえる。

### (3) 秋月

1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いのあと、筑前は黒田長政が治めることになる。叔父黒田直之が秋月に居館を定めたが、死去した後、1623年（元和9）から長政の三男の黒田長興が秋月を治めた。彼はその翌年家中屋敷の縄張りを行い、今日の町の原型が築かれた。以降、秋月は城下町として発展していく。

秋月は東から西へ流れる野鳥川が山間部から平野に出るところにある山に囲まれた盆地状の場所である。藩主の居館は東の奥の小高いところにあり、その西側の下が武家屋敷町、そしてさらにその下が町人町である。

城下町の絵図として3枚知られている。「寛永年間秋月家中屋敷割り図」は写図が伝えられている。寛永年間（1624—44）よりもやや下るが、初代藩主黒田長興の時代（1623—1665）に描かれたと考えられている<sup>9)</sup>。この図には川や大きな水路は記されているが、残念ながら水道のような細かな水路は描か

れていない。「明和五年秋月御城下絵図」（1768）は城下全体を描いた屋敷割り図だが、この図には細かな水路が表現されている。次の「文政二年秋月御城下絵図」（1819）も同様の絵図であり、水路が表現されている（図—5）。この2枚を比較すると、1768と1819の水路網はほぼ同じである。

この水路網だが、野鳥川や天神川などから取水し、町中に巡らされている。武家屋敷地では水路は道沿いか敷地の境界を流れている。町屋地区だが、特に東西の道沿いにのびる中町と下町では道路の中央ではなく南の町屋沿いに水路が設けられている。北側では、道沿いではなく、町屋の裏側に東から西側へと流れる別な水路が設けられ、敷地から敷地へと水が流れている。そこは町屋の裏側であることから、庭が造られやすい場所であり、その場所を水路が縦断している。

明治以降、多くの武家屋敷は田畑に変わったが、町屋地区は町として残っている。水路の現況について、文政の絵図と比較すると、ほとんどが残されて

おり、さらに細かな水路が増えている（図－6）。文政の絵図には何らかの理由で記載されない水路が存在していたか、あるいは武家屋敷地区に新たな水路が多い点で、水田化された時に新たな水路が設けられたことが考えられる。

庭と庭とを結ぶ水路は、町屋地区である中町と下町の北側半分に流れているだけである。この水路は文政の絵図と比べるとほとんど変わっていない。上流である中町の東側で水路がこみ入るように改変されているにすぎない。水路と池とのつながり方だが、一軒の家が水路から池に水を引き込み、そしてまた敷地内で水路に返す方法である。

武家屋敷地区がほとんどが農地化した中で、残されている屋敷の庭は、同様に、道路沿いの水路から水を取り入れ、水をその水路に返している。

## 5 城下町の比較

松代、小幡、秋月の水路を比較すると、小幡と秋月では江戸時代の水路網がほぼ残されているのに対し、松代では城の周囲の道が変わり、大きな水路しか残されていない。泉水路などの細かな水路が残されているのは給水源に近い城下町南部が主である。

庭と庭とを結ぶ水路だが、松代と小幡ではこのような水路が存在するのは武家屋敷地区だけであり、秋月では町屋地区の一部である。

池と池とを水路が直接に結んでいるのは松代だけであり、小幡と秋月は庭の水路から池に水を取り入れては戻している、という違いがある。

小幡と秋月では水路が上水路を兼ねているが、松代では道路に上水路であるカワが流れ、泉水路は別に引かれている。上水路と別系統の水路を持っているのは松代だけである。ただ、現在泉水路が残されている地区に限ると、カワやセギを描いた城下町絵図は残されているのだが、泉水路は描かれていない。現況図があるのみである。

城下町絵図に描かれた水路を追っていくと、松代の泉水路だけが城下町絵図に描かれていないことがわかる。水道絵図だけに示されているが、他の城下町では水道絵図は残されていない。失われたのか、松代で特殊な事情があったのかは、現在のところ不明である。

このように、これらの城下町の水路は、以上のように、それぞれ固有の特徴を持っていることが明確

になった。

## 6 おわりに

水路を比較していくと、3つの城下町でとりわけ異なるのが松代である。3系統の水路網を持ち、それらが複雑に入り組んでいる状態が現況に残されているのは、社会の変化に対して先人が苦勞して水路網を残してきた様子がうかがえる。秋月では伝統的建造物群保存地区保存計画が立てられ、庭と庭とを結ぶ水路も保存の対象とされているのに対し、松代を対象とした長野市伝統環境保存条例では水路の保全を直接的にうたっていない。また、小幡でも城下町や小堰の保全がまだうたわれていない。この点が問題と言える。

ところでこのめずらしい水路は、その性格上、人目に触れにくい場所にある。特殊なだけに、どのようにその良さを提示していくか、今後の重要な課題であろう。

## 引用文献

- 1) 長野市教育委員会（1982）：庭園都市松代（伝統的建造物群保存対策調査報告書）：長野市，93pp
- 2) 信州大学工学部建築学科松本直司研究室（1985）：長野市松代三町水路活性化についての調査報告書：信州大学工学部建築学科松本直司研究室，72pp
- 3) 佐々木邦博，米林由美子，平岡直樹（2001）：城下町松代（殿町地区）において江戸時代に造られた泉水路の形成過程とその用途：ランドスケープ研究 64（5），419-422
- 4) 米林由美子，佐々木邦博（2002）：長野市松代町の伝統環境保全区域全域における水路の現状と今後の保全について：平成14年度日本造園学会関東支部大会事例・研究報告集 20，5-6
- 5) 甘楽町教育委員会（1983）：小幡の町並（群馬県甘楽郡甘楽町小幡伝統的建造物群調査報告書）：甘楽町教育委員会
- 6) 甘木市教育委員会（1980）：秋月（秋月城下町伝統的建造物群保存対策調査計画報告書）：甘木市教育委員会，152pp
- 7) 國基博，永松義博（1999）：福岡県秋月地方の庭園について：日本造園学会九州支部平成11年度長崎大会研究・事例報告
- 8) 同掲書3)
- 9) 同掲書6)

## Characteristics of Water Systems Connecting Gardens in the Castle Town

Kunihiro SASAKI\*, Yumiko YONEBAYASHI and Naoki HIRAOKA\*\*

\*Department of Forest Science, Faculty of Agriculture, Shinshu University

\*\*Atelier Espace

### Summary

The pond of garden in the castle town gets generally water from water course running out of the samurai residence, and returns it to the same water course. But, the special water course exists rarely. The water runs from garden to garden directly. This type of water course exist now at Matsushiro, Obata and Akizuki. This study aims to clear characteristics of special water courses and the differences among three castle towns. As a result, it becomes clear that each towns has completely different characteristics of water courses. Their aims and their extents are different too.

**Key word** : Matsushiro, Obata, Akizuki, Water system of castle town, Garden